

Title	切支丹時代の宣教師と幕末の宣教師：その超國家性と特定國家性について
Sub Title	
Author	佐藤, 直助(Sato, Naosuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

切支丹時代の宣教師と幕末の宣教師

—その超國家性と特定國家性について—

佐藤直助

昨年六月二十五日より同二十七日まで開催された日本諸學振興會第三回歴史學會に於て私は右の如き題の下に發表を行つたのであるが、當時時間の關係上言ひ足りないところがあつた。そこで機會があれば是非これを補つておきたいと思つてゐたところ今回本誌によつてその機會が與へられたことは私にとつてまことに幸ひな次第である。

—

我が國に切支丹の傳つたのは天文十八年（一五四九）であり、これを傳へたものはイエズス會である。それから約半世紀の間は全くイエズス會だけが獨占して日本の布教に當つたのであつたが、文錄二年（一五九三）フランシスコ會がフィリッピンより來つて日本布教に参加することになつて、次々にドミニコ會やアウグスチノ會が渡來し、迫害禁教の裡に布教活動を行つた。そしてこれがまた約半世紀續いて、その間秀吉・家康・秀忠を経て家光に至り、寛永十四年（一六三七）から十五年にかけて起つた島原の

亂に極度に恐怖して遂に禁教鎖國が徹底的に斷行せられることになり、さしも執拗だつた切支丹も地下に潛らざるを得なくなつたのである。

試みに以上の如き切支丹傳道の興廢の跡を時代區分するならば、第一がイエズス會の布教獨占時代、次が多數宣教會の活動時代、そして最後が潛伏時代と呼ぶことが出来るであらう。私はその中の最初のイエズス會の布教獨占時代の宣教師を取上げてその性格づけを先づ行つて見るつもりである。

イエズス會はルーテルによつて捲起された宗教改革と時を同じうしてカトリック側に起つた修道會で、それはカトリックの内部肅正と外部への宣教を目的とするものである。創立者は聖イグナシオ・デ・ロヨラ、聖フランシスコ・ザヴェリオを中心とした十名であるが、その生國はスペイン、フランス、ポルトガル等種々に分れてゐる。いまこれを表示すれば次の通りである。

生 國

イグナシオ・デ・ロヨラ (Ignace de Loyola)	スペインのギプスコア (Guipuscoa)
ピエール・フェーヴル (Pierre le Fèvre ou Favre)	フランスのオートサヴォア (Haute-Savoie)
フランシスコ・ザヴェリオ (Francis de Xavier)	スペインのナヴァール (Navarre)
ディエゴ・ライネス (Diego ou Jacques Lainez)	スペインのソリア (Soria)

アルフォンソ・サレメロン (Alphonso Salemeron) スペインのトナレ (Tolède)

シモン・ロドリゲス・デ・アゼヴェド (Simon Rodoriguez de Azevedo)

ポルトガルのヴセリヤ (Voucella)

ニコラス・アルフォンソ (Nicolas Alfonso) スペインのボバディリヤ (Bobadilla)

クロード・ル・ジエイ (Claude Le Jay) フランスのオートサヴォア (Haute-Savoie)

パシヤーズ・ブロエ (Paschase Broët) フランスのベルトランクール (Bertancourt)

ジャン・コドリ (Jean Coduri) フランスのセーヌ (Seine)

かやうにイエズス會は創立當初より國籍を超越して會員を集めたのであつて、この事は後述するところの幕末に渡來したパリ外國宣教會と大いにその性格を異にするものであつて、こゝに先づ彼等の超國家性を見出すことが出来る。

イエズス會が日本に渡來するに當つてはその進路をポルトガル人の植民及び通商の線に沿うて東に向ひインド、マラッカを経て來たのである。このポルトガル人の方向に進んだことがまた我が國に渡來のイエズス會をして、スペインの勢力を背景として西に向つた他の宣教會と性格を異ならしめたのである。ポルトガルはスペインに比して、その國の大いさ、國の力が劣つてゐた爲、ポルトガルの通商及び植民の方法はスペインほど惡棘ではなかつたやうに思はれる。メキシコを征服したコルテス (Cortez) やイ

ンカ帝國を亡ぼしたピサロ (Pizarro) の如き所謂コンクイスタドレス (Conquistadores) の極端な暴虐を見て思ひ半ばに過ぎるであらう。勿論これにはスペイン人の向つた南北アメリカが強力な文明を有せず、また強固な國家をなしてゐるものがなかつたことにもよるのである。これに反しポルトガル人の向つた東洋には古くから固有の高い文化があり、また相當の國家をなしてゐるものが多かつたのであるから、スペインに比し弱小なポルトガルは自由に一方的な行動をとることは出来なかつた。特に日本の如き彼等の本國から最も遠く離れ、而も古來の高い文化を有し強力な國家をなし、それに當時は恰も足利末期戰國の時代であつて、各領主は強い武力を備へてをつた時であるから、我が國に來たポルトガル人は敢へて強壓的手段を採ることをしなかつた。従つて彼等は我が國に對しては領土的な野心を棄て、専ら通商によつて利益を獲得しようとしたのである。

ポルトガル商人と共に來たイエズス會の宣教師はこの邊の事情を充分承知してゐたので、日本布教に當つては本國の力を誇示して臨む不利益を避け、つとめて學問藝術、特に醫術天文等を用ひ、また慈善事業により、専ら國家國民を超越したところの手段によつて布教したのであつた。内田銀藏博士が切支丹の弘通の迅速なる原因として五項目を擧げてゐるが、その第五として「最初のゼスイトの僧にはサヴィエルをはじめ優秀なる人物多く概ね品性高尚、行狀堅固、加之醫療に通じ天文地理に詳しく科學を説き奇瑞を示し恩惠を施して人の信仰を博せり」(日本近世史第一編第一章)と言つてゐるのは全く肯綮を

得てゐると思ふ。而してこの事は支那に於ける所の同じくイエズス會のマテオ・リッチによつて代表される布教と少しもかはる所がない。

日本に來たイエズス會の宣教師はポルトガル商人のあとを跟いて來たのであるが、彼等はポルトガルの國とは直接には何等の關係もなかつた。勿論布教の費用などポルトガルの國費によつて支辨されたのではない。彼等自らその莫大な布教費を調達せねばならなかつた。彼等はヨーロッパからの寄附を仰いだことは確かであるが、それには送金の不便や途中の危険があり、確實を期し得なかつたので多く現地で調達する方法を探り通商關係からそれを求めた。先づポルトガル商人の寄附、次がポルトガルとの貿易で利益を受ける九州諸國の領主の援助に頼つた。併しこれのみでは恆常性を保しかねたので彼等自身絹の賣買に乗出した。この絹の賣買には兎角の非難もあるが、こゝでは何故さうせねばならなかつたかを知ればよいのであるから結論だけに止める。即ち日本に現金を送らうとすれば兩替のために二〇%から三〇%の損失を蒙る。それを免れるためであると言はれてゐるが、何れにしても彼等はマカオで絹を買付け、これを日本に賣込んだ。後に巡察使ヴァリニヤニはこれを一層確實にせんとしてポルトガル商人が毎年日本に舶載する一千五百キントル即ち七萬五千疋の絹の中、五十キントル即ち二千五百疋だけは日本布教の費用のため別にするやうに彼等商人と約束を取決めさへしてゐる。併しこれによつて宣教師等は毎年一萬五千から五萬フランの利益があつたと稱せられる。これもつまりは國家を背景とせず自

力で布教せねばならなかつたためであると思ねばならない。

以上の如くイエズス會の日本布教の獨占時代に於ては細かな點では異論もあるであらうが、大體に於て宣教師等は背後の國家を笠に着ることなく世界宗教に適はしい超國家性を堅持して布教を行つたのである。またこれを我が國の方から見るならば、上記の如く當時我が國は極めて強力な武備をもつてをつたのと更にまた我が國は古來一度も外國の侮りを受けた例がなかつたとの自負心も手傳つて、ポルトガル商船で來る商人及び宣教師を南の蠻人呼ばりをしたのであつた。一方これは當時の我が國がまだ世界の情勢に暗くヨーロッパの諸國をよく知らなかつたため我が國に渡來したものはその屬する國籍の何れを問はず一樣にかゝる南蠻人なる稱呼を與へたのである。つまり我が國はまだ世界史的になつてゐなかつたのである。この間の事情を最もよく示すものとして慶長元年に土佐の浦戸に漂着したスペインのサン・フィリップ號の事件を擧げることが出来る。サン・フィリップ號の船長が世界の海圖を展げて本國の強大を誇示した積りであつたが、これは我が方に對し何等の意味をもなすものでなく、却つて徒らに秀吉の激怒を爆發させるのみであつた。

故に我が國の方から見れば宣教師がスペイン人であらうがフランス人であらうが將又ポルトガル人であらうが毫もそこに區別を立てる必要は無かつたのである。また一方前述の如くイエズス會の宣教師に於ても背後の國家の力を語らなかつたのであるから、これらの二點から見て私は特に切支丹時代の

前半期の宣教師にその國家を超越する性格を取上げこれを超國家性と名づけ、これを幕末の宣教師がその本國の力に頼つて布教したその特定國家性に對蹠せしめようとするものである。

かやうにイエズス會の日本布教獨占時代に於ては宣教師は超國家性を堅持したのであるが、この態度は次ぎの多數宣教會の活動時代に於ても大體そのまゝ踏襲されたやうであつた。

次ぎに阿部眞琴氏の「切支丹傳道の史的意義」(日本宗教史研究會著、日本宗教史研究所收)に於ける國家と商人と宣教會との關係を見てみよう。「東洋に於ては、ゼスス會はポルトガル人と、フランシス會ドミニクス會はイスパニア人と共に活動した。カトリック諸國家とその教會は、形式上ロマ法王統制の下にあつた、諸國民間の對立は法王の統制によつて消滅したわけではなかつた。殊に、貿易及び植民政策の上で、諸國民は法王制度を通じて、時には法王の統制に背反してまでも對立した。この點で、當時の法王制の權威と中世の夫とには格段の差があつた。諸教派は、その結びついた國民・國家間の對立を反映して對立關係に立つた。日本に於ける切支丹布教運動の中にも、そうした對立をみる事が出来る」。これによつて見ると我が國に渡來したイエズス會はポルトガルとスペインの對立のためにフランシスコ會と對立したと解せざるを得ない。かくては宣教會は、國家を背景とする商人及び植民と何等選むところがない。これはカトリックの宣教會、特にも日本に布教したイエズス會の性格を全然糺明してゐない。若し前述の如きイエズス會の超國家性を發見するならば敢へてかゝる言はなさないであらう。イ

エズス會とフランシスコ會の對立は主として宣敎の熱意より互にローマ敎皇の委託或ひは許可云々を繞つての抗爭であつて、國民・國家間の對立を反映したものではなかつたのである。

二

次ぎに幕末の宣敎師についてその性格を見ることにしよう。それに先立つて幕末から今日に至るまでの布敎の跡を時代區分して見たいと思ふ。パリ外國宣敎會は安政五年（一八五八）の日佛修好通商條約の締結と同時に我が國に來り、舊信徒の發見から明治の中葉まで約半世紀間は同會の獨占的布敎が續いたのである。勿論宣敎師の補助をなす修道會の來朝は明治の中葉以前から行はれてゐる。即ち明治五年にサン・モール女子修道會、十一年に聖パウロ女子修道會、二十年に佛國パリのマリア男子修道會、二十九年にトラピスト男子修道會、三十一年にトラピスト女子修道會といつた風に續々來朝した。これらの修道會はいづれもフランスに母院を有するもので、パリ外國宣敎會に招かれて來たのであつて、我が國の布敎は全くフランス一色に色採られたのである。それが明治三十七年に至つてはじめて國籍を異にしたスペイン人の宣敎會即ちフィリップ管區ドミニコ會が我が國の布敎に参加することになり、その後は獨・伊・加・米等の種々の宣敎會が數多來朝して日本布敎に従つた。それが滿洲事變、支那事變と日本の大東亞政策が進められるに及んでこのカトリック敎史にも新しい時代を劃さざるを得なくなり、

こゝに邦人を統理者とする自主的布教時代に入ることになり、更に大東亞戦争の勃發と共に益々これが強化されて名が實に副ふやうになつて來た。いまこの幕末から昭和までの一世紀のカトリック布教史を時代區分するならば、前半世紀はフランス人の布教獨占時代、否もつと明確にパリ外國宣教會の布教獨占時代となり、後半世紀は多數宣教會の活動時代となり、これから邦人の自主的布教時代に入ることになつて、實に切支丹時代に於ける布教の時代區分と興味ある對照をなしてゐる。

いま私は幕末以後より明治の中葉までの我が國に於けるカトリックの布教は全くフランス一色になつたと稱したが、このことは幕末に至つてカトリックの復活を目指して我が國に渡來したパリ外國宣教會の特定國家性の現はれなのである。元來この宣教會はフランス人及びフランス語を母語とする國民のみを以て會員とする宣教會である。これは切支丹をはじめ我が國に傳へたイエズス會が會員の國籍を問はないのとは對蹠的なものである。かうした會則が如何にして出來たかについては、會の創立當時の事情を知ることによつて了解されると思ふ。この會の生れる抑々の動機は、印度支那に布教したイエズス會の宣教師アレクサンドル・デ・ロオデが迫害のため一六四九年ヨーロッパに歸り教皇インノセント十世に對し、若し印度支那に司教を送り土着民から司祭を作ることを行なかつたならばやがて安南人への布教は潰滅に歸するであらうと進言したことによるのである。そこで教皇は彼に適當な司教を求むるやう命じたので、彼はイタリヤ、スイスと探し廻つたが目的を達することが出來ず、遂に一六五三年パリ

に來た。こゝで彼は、僧俗青年の修養會とも稱すべき極く簡単な組織の會を主宰してゐる同じくイエズス會員のバゴー (Bago) に會つた。ロオデは直ちに彼の目的を話し且つ東洋への布教を説いたところ、早速バゴー及びその修養會員の若い司祭達の賛成を得た。このことが、ローマ聖廳に達し、インノセント十世はパリ駐在敎皇特使バギー (Baguti) に命じて、その會員中より、パリュエー (Palhu) ド・ラヴァル (de Laval) 及びピック (Pique) の三名を選ばしめ、やがて彼等を印度支那への司教に擧げることにした。然るにこれに對しポルトガルから猛烈な反對があつた。それはフランス人司教が印度方面に行くことはフランスが東洋に進出することになり、ポルトガルの勢力圏が荒されてその利益が奪ひ取られるとの恐れからであつた。ポルトガルは敎皇インノセント十世にその撤回を要求した。當時フランスはルイ十四世の極盛時代であつたが敎皇はポルトガルが多年東洋布教に貢獻したことを勘へ、遂にその要求に應ずることに決した。このポルトガルの工作を知つたフランスの司祭等は大いに怒つて、一六五三年七月敎皇に對し長文の書を送り、布敎國に於てはその國の土着民の司祭が必要である、それには司教の派遣が先決問題であると論じて即時その實行を求めたのであつた。

この翌年當の發頭人であるロオデはペルシャのイエズ會の首長となつてパリを去つた。こゝでロオデのバリ退去を殊更に記するのは往々ロオデを以てバリ外國宣敎會の創立者と誤る向もあるからである。

一六五五年一月インノセント十世が崩じアレクサンドル七世が位に即いたが、依然としてこの問題を

繞つてポルトガルとフランスとの對立紛糾が續いた。併し結局ローマの布教聖省はパリューとランベール (Rambert) を支那及びその周圍の諸國に於ける教皇代理に擧げ、アレクサンドル七世は兩者を司教に任命した。尋いで更にパリュューは同志の第三番目の司教としてコトレンヂ (Cotolendi) を推薦してその任命を見た。その後一六六三年パリに外國宣敎の神學校の設立されるに及んでパリ外國宣敎會の完成を見るのであるが、以上で大體同會創立の經緯は明かであると思ふ。

かくの如き創立事情であり、修道會にあらざるパリ外國宣敎會はその會員をフランス人とフランス語を母語とする國民に限つたので最初から國民的意識が強かつた。事實同會の宣教師はフランス人であることを常に強く意識し、本國を背景として布教地に活動したので、自然フランス政府との關係も密接になつた。その好例として十八世紀の末葉印度支那の布教に従事し、本國フランス政府の援助の下に縦横に活動して、遂に十九世紀に至つてフランスの勢力がこの半島に確立されるに至る基となつた同會のピニエー (Pigneau) 司教を擧げることが出来る。併しこの時代はフランス國內が多事多端であつたが、我が國に同會が來た頃は恰もナポレオン三世の時代であり、フランスがヨーロッパに於ては四隣に優勢を誇り、海外に於ては安南及び交趾支那を併せ、支那と通商貿易を結び、カンボヂヤを保護領とした時代であつて、フランス軍艦は東亞の海に旺んに示威を試みてゐた時代であつた。それにナポレオン三世は國民の信望を收めるためにローマ教皇との親和に努め、カトリックに援助を吝まなかつたのである。

殊に當時の東洋艦隊の司令長官セシル (Cécille) は熱心なカトリック信者であつたから、パリ外國宣教會の宣教師が幕末の我が國に來るにあつては常に祖國フランスの軍艦に乗つて來ることにもなつたのである。實にこれほど特定國家性を示すものはないであらう。ヴィリヨン (Villion) 師が警察官から一々調べられるのを免れるために旅行免狀を背中に吊して歩かれたとの挿話の如きも師のユーモアを語るものではあるが、併しこれもそのみでは看過されないとこの當時の宣教師のフランス人たる身分の誇示、即ち背後の國力を頼む潜在意識の一つの現れではなからうか。

かやうにパリ外國宣教會の宣教師等はフランス人としてフランスの國力の下に我が國に布教した。切支丹時代には迫害殉教に對し、而もヨーロッパ人宣教師の迫害殉教に對してさへ實力行使の氣勢をさへ示すことのなかつたのに今や彼等は邦人信徒に對する迫害に對してさへ直ちに外交問題としてフランスの國力に懇へるに至つたのである。彼等は飽くまでもフランス人、特定國家人として行動したのである。併し彼等宣教師をしてかゝる布教手段をとらしめたのは一方に幕末の我が國が既に我が國力を知り世界を知つて、世界史的になつてゐたからでもある。

以上切支丹時代の、特にその前半期に於けるイエズス會の宣教師と幕末に於けるパリ外國宣教會の宣教師の性格とを捉へて、その超國家性と特定國家性について簡單に述べたのであるが、併しこれを以

てたゞちに前者のみを聖雄と讃へ、而してその對蹠的考へから後者を以て一國家の傀儡と誤つてはならない。兩者共に聖雄の意氣に燃え我が布教に挺身したことはない。特にパリ外國宣教會の宣教師が多難な世界史上の日本に於て如何に人類愛に燃え立つて聖教の宣布と共に慈善、教育の諸事業を起し、積極的に我が國のために活動したかはもはや周知のことである。今私がそれ等の點について全く沈黙し、彼等の一面のみを説くことに急なるため萬一誤解を興へるやうなことがあつては洵に申譯ない次第である。私とて、否私は人一倍我が國に於けるパリ外國宣教會の宣教師の眞に神の僕としての美はしい活動を知悉してゐる。他日必ず稿を更めてそれを述べたいと思つてゐる。